▶高田群次郎氏

偉人たちの戦いくさ

～プロローグ～

世界には後世へ受け継ぐべき歴史・文化等があり、色褪せて忘れさせてはいけない「大切なモノ」があります。戦争の惨劇や歴史的大事件、はたまた改革の政治や人々の築き上げてきた風習など、考えてみれば山ほどの事柄が挙げられるでしょう。

東秩父においてはどうでしょうか。「細川紙」の紙漉き技術の文化は絶やしてはいけないこと、和紙が戦争でどのように使われていたのか目を背けてはいけないこと、やはりたくさんあると思います。

そのようななかで、東秩父をつくった「偉人」たちに目を向けることにしました。「偉人」たちがどのような生涯を過ごし、この東秩父の基の姿を作ってきてくれたのか、今を生きる人たちに知ってほしいと思います。

今を生きることを伝えるための広報から、少し昔を覗いてみましょう。題名は故宮崎晋氏が高田群次郎氏葬儀の際に贈った言葉にある「善き戦を戦われた先生」より頂戴いたしました。誰しも人生は戦。東秩父を戦場とした偉人たちへ、その栄光をたたえて。

―高田群次郎氏―

小学校のころ、社会の授業で村の教材資料の中に「高田群次郎の石碑」というのを目にしたのを覚えています。「村にはこんな石碑になるような偉大な人がいたのか」と記憶には残っていますが、どのような人で、村のためにどんなことをしてくれたの？と聞かれると答えられない方も多いのではないでしょうか。今回は３回にわたり、高田群次郎氏に着目していきたいと思います。

第1章　高田群次郎氏の生涯

明治4年（1871年）坂本村（現大字坂本地区）に生まれた群次郎氏は、81歳で生涯を終えたうち、政治という道を人生の大半歩み続けました。36歳で政治に関りを持つようになり、その世界へ足を踏み入れていきました。以降、計3代（3期）26年に及ぶ「槻川村長」として人生をささげていかれたのです。

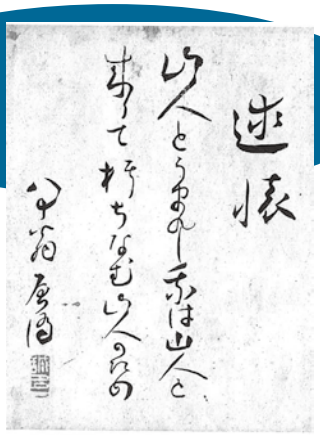
村長就任時に於いての功績は第2章にて紹介をしますが、教科書に書かれているところでは、村の雇用促進と防災経路の確保を行ったり、診療所の開設や図書館開館など、幅広く村政を遂行されました。

文学を愛し、いろいろな文献を読み、自らの人生や様々な政治を研究されていたようです。また、第3章で紹介予定の「宗教」に対する関心は並々ならぬもので、それにまつわる文献も多く好んで読まれていました。

好きな言葉は、「見識」「覇気」「活力」などであり、そこから察するに明るく活発的な人物像だったのではないでしょうか。

歌を詠むことも好んでいたようで、「山人と生れし我は山人となりて朽ちなむ山人のため」という歌は石碑にも残っており、今でも語り継がれています。「この地に生まれた自分はこの地の者として生涯をささげる、村民のために」といった内容と推測されることから、群次郎氏が村のため、村民のために必死に村政を行ってくださっていたことがうかがえます。また、村長辞職の際に「山人と生れし吾は山人の友とふりてぞ世をばおへふむ」とも詠んだ歌が残っています。

それほどまでに村を愛し、村民を愛した人が行っていた政治がどんなものか、興味がわいてくれたでしょうか。次号では、行った政策をご紹介します。



▲詠まれた歌